

## 論文の内容の要旨

論文題目 多人種／人種の社会的意味——戦後日本における「混血児問題」の歴史-社会学的記述——

氏名 有賀 ゆうアニース

本研究は、主に 1940 年代後半から 1960 年代にかけての日本における「混血児問題」の経過を概念の用法と連関という観点から分析することで、「混血児」たちの経験の可能性がどのような社会的歴史的条件によって規定されてきたのかを明らかにすることを目的としている。

第 1 章では、多人種者という論題、すなわち「別個の人種を構成していると信じられている 2 つ以上の集団の子孫」に関する先行研究のレビューを行った。英米圏における多人種研究の背景と軌跡と成果を概観した上で、本研究が定位する日本における多人種者の社会的位置・処遇および研究の歴史を概観した。以上の知見を踏まえ、現代日本社会の原点とも言える時代に多人種者が最も社会的争点として顕在化した事例として「混血児問題」を位置づけた。そして「混血児問題」に関する先行研究の限界として、「混血児」をめぐる概念の局所的偶発性（ある人やある行為・経験をどのようなカテゴリーや概念で理解するのかはそのつどの当事者が関与している活動や状況に依存していること）と歴史的規定性（ある人やある行為・経験を理解したり評価したりするにあたってどのような概念や記述、またそれらに結びついた基準や知識が利用可能であるかということ自体が時代の変化に制約されるものであること）とが見落とされていることを指摘した。そして、当事者たちの概念の実際の用法を局所的な活動・場面や歴史的な過程・文脈に即して観察することで、「混血児」たちの経験の可能性がどのような社会的歴史的条件によって規定されてきたのかを明らかにするという本研究の代替的な目的を設定した。

第 2 章では、以上の研究目的を達成するための調査・分析方針を探った。概念の局所的偶発性と歴史的規定性という「混血児問題」の社会学的探究にあたっての留意点をふまえた分析視座として、エスノメソドロジー、歴史的な存在論の視点を参照し、当事者たち自身の局所的状況に応じた概念の用法・連関とその歴史的規定性の変異の分析という一般方針、またそれから派生する本研究の資料収集・分析の具体的手順を設定した。

以上の 2 つの章で準備された分析アプローチ——「混血児問題」の歴史-社会学的記述——を応用し、主に 1940 年代後半から 1960 年代にかけての日本における「混血児問題」の経過を分析したのが、第 3 章から第 6 章にかけての各章である。

第 3 章では、占領期初期（1945-46 年）および「混血児」の誕生の直前という歴

史的文脈における「混血（児）」をめぐる民衆や政府の活動を検討した。1945年の敗戦直後の時期における民衆流言の分析をつうじて、人種・性別・国家・人格といったカテゴリーに結びついた知識や規範、特にカテゴリー的序列や内婚規範を参照することで、「混血児」の誕生や「混血児」の母の出現を問題として理解することが可能になっていたことを明らかにした。そしてこのような「混血児」をめぐる知識や規範が引揚援護政策や売春政策などの公的領域でも参照されることで、売春の組織化や人工妊娠中絶の規制緩和・合法化といった活動が正当化・実行されていった経過を跡づけた。

第4章では、「混血児」の出生後・占領期の長期化という歴史的な文脈のなかで「混血児」をめぐる概念連関がどのように機能してきたのかを検討した。「混血児」の妊娠出産を経験した実母たちの我が子の養育に関する選択が、第3章でみた日本側の概念連関だけでなく、アメリカ側の内婚規範にもとづく制度的環境によって規定され、「混血児」の非嫡出子や孤児の偏頗という状況が現出したことを示した。またこうした状況を前にした政府の活動に着目し、「児童／子どもとしての混血児」および「孤児／要保護児童としての混血児」という知識を前提として、「混血児」は児童福祉行政の対象として措置されていた経緯を明らかにした。同時に、こうした公式の対象設定に反して、施設の一部による「混血児」を特殊化する業務を通じて、「混血児」処遇をめぐる統合志向と分離志向の対立が萌芽したことを示した。

第5章では、占領期の終了と「混血児」の学齢期への接近という2つの契機によって、「混血児問題」をめぐる議論が多方面で沸騰していく経過に焦点を当てた。まず、教育対象としての処遇、国家的帰属の如何が争点化されたこと、この議論において、第4章で明らかにした境遇に関する知識や人口・人種的差異についての知識が参照されることで、統合と分離の適否をめぐる議論が展開されたことを確認した。他方、社会運動団体の活動を通じてこれらの知識が再編されることで、学校教育・児童福祉上で解決が可能かつ必要な問題として「差別」「偏見」が同定され、「児童／子ども」かつ「日本人」としての「無差別平等」を強調する原則と制度が整備されていたことを明らかにした。またその一方で、日米両国における福祉事業者や活動家らの間では、日本におけるその人種上・家族関係上の異質性と迫害の不可避性、アメリカ側・父親側の責任という構図が共有されることで、「混血児問題」に対する、一方における「無差別平等」の名のもとでの統合（主流政策）、他方における国際養子縁組を通じた分離（傍流政策）という相異なる政策方針が確立し

たことを解明した。

「混血児」が学齢期直前という時期において「混血児問題」をめぐる政策形成過程を解明したのが第 5 章だとすれば、「混血児」が学齢期（やその後の青壮年期）に移行する時期における政策の運用過程、そしてそれが「混血児」たちにもたらした帰結に照準したのが第 6 章である。まず、統合政策の展開を跡づけ、それが人種上の「差別」「偏見」を識別する機会を教員に提供しつつ、局所的状況によってその運用が屈折されていったこと、家庭環境がより顕著な問題として重視されるのと引き換えに人種的差異の問題が後景化していったことを示した。そして、国際養子縁組を含む分離政策の展開を跡づけ、人種や家庭環境や経済状況のカテゴリーが参照されることで移住の前後の段階において「混血児」の生活史が分岐していったこと、またこうした国際養子縁組の経過とともに、政策カテゴリーとしての「混血児」の重要性が減衰していったことを跡づけた。最後に、以上のような「児童／子ども」としての人生段階を前提とした施策がもはや有効ではなくなった時期において、定住と移住、就職、結婚・出産といった基本的な生活機会の選択が「日本人-混血児」、「白人-黒人」、「一般家庭出身者-母子世帯出身者-施設出身者」といったカテゴリーの区分によって条件づけられてきたことを明らかにした。

第 7 章では以上の知見を踏まえ、本稿の初発の問いに対して、「混血児」カテゴリー、あるいはより広く人種カテゴリーに結びついた概念連関をつうじて「混血児」を対象とした社会統制が遂行されてきたということ、そして人種にとどまらない多様な種類のカテゴリーを包含したその概念連関が累積的かつ複合的に――さまざまな場面・時期を横断してその帰結が積み重なっていくという形で――「混血児」の経験の可能性を条件づけてきた、という答えを与えた。すなわち、「混血児／日本人」「白人／黒人」といった人種のカテゴリー・境界をめぐる常識的・専門的知識・規範は、国籍、人生段階、性別、生育環境といった異なる種類のカテゴリー・境界と複合的に機能していた。そしてその複合性によって活動領域や時代を横断する形で人種カテゴリーが作動したことで、厚生省や文部省や民間団体による「混血児」に対する公的・制度的処遇、そしてそうした処遇のもとでの「混血児」自身の誕生、養育、就学、進学、就職、結婚・家族形成といった種々の活動や経験が条件づけられてきた。

以上の知見の総括を踏まえた本論の理論的意義として、(1) 先行研究が前提としてきた多人種性や人種的境界への志向そのものが歴史的かつ局所的に組織され、人

種的マイノリティの経験を規定してきたことを解明した点、(2) 一般に人種的境界とは無縁と想定されてきた現代日本社会の制度的編成との関連において人種的境界が一貫して作動することによって「混血児」たちの経験が形成されてきたことを解明した点、(3) 類似した文脈を共有する他国との比較によって日本における多人種者の位置の一般性と特異性を同時に解明した点、(4) 差別の基準や意味を研究者が前もって用意するかわりにその理解可能性の条件・基準とそうした条件依存的理解の社会的帰結を記述するという代替的分析方針を提示した点、などを整理した。